

ぼくらの気持

栗本 薫



ぼくらの^{きもち}気持

^{くりもと}
栗本 薫

© Kaoru Kurimoto 1981

1981年 8月15日第1刷発行

1989年12月25日第19刷発行

発行者——野間佐和子

発行所——株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112

電話 東京(03)945-1111(大代表)

Printed in Japan



講談社文庫

定価はカバーに
表示してあります

デザイン——菊地信義

製版——豊国印刷株式会社

印刷——豊国印刷株式会社

製本——株式会社大進堂

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。
送料小社負担にてお取替えます。(庫)

ISBN4-06-136209-7



講談社文庫

ぼくらの気持

栗本 薫

講談社

目次

第一部

1 原稿依頼 7

2 構想 37

3 絵コンテ 69

第二部

4 ネーム 100

5 下絵 131

6 ペン入れ 162

コーヒーブレイク

7 ドライヤ 194

第三部

8 ゴムかけ 225

9 ホワイト 257

10 校了 287

エピログ 318

解説 二上洋一 322

ぼくらの気持

第一部

1 原稿依頼

「それにしても、えらい久し振りやなあ」

つくづく、ヤスヒコが云った。

さっきからこの台詞は、つごう十回めだ。こいつ、酔っ払うと、やたらしつこくなる。

「まったく。久し振りだよ」

信も、飽きる気配もなく返事をしている。信は信なりに、ひさびさの一族再会が、泣きたいくらい、嬉しいのかもしれない。

「信も薫も少しも変わってへんなあ。それだけが、ほんま、嬉しいワ。おれなんかもう、変わりはてしてもたよって」

これも、さっきから、何回きいたかわからない。

「おれ、^{ほんま}本当、嬉しいねん。おれなんかもうあかん、こんなもん締めよってからに、もうどもならんけど、お前らがそうしてくれと、会うるときだけは、わあ、あのころのままやって——あのころのおれらみたいに、ずっとつるんで遊びまわっとるみたいな氣イがするねん。ほんとに、心強いねん。なア、頼むから、お前らだけは、変わらんといてな。そのまんまの信ちゃん

と薫ちゃんできてな、おれ、——おれもうあっちにペコペコ、こっちにペコペコ、大学も行きよらん小娘だの、威張りくさつとる年増だの、先生先生で頭さげて歩いて、校了や入稿やって何の氣イの休まるときもあらへんけど、なあ、お前らは——なア」

「そう云うけどさ。これで、ぼくだって、つらいんだよ、けっこう」

ぼくは銚子をさかさにし、新しいのを頼むために、手をあげた。

学生のころには、三日にあげず通いつめた、大学に近い焼きトリ屋だ。ぼくたちのテーブルには、トリの残骸と、空になった銚子がうずたかく積みあげられ、それを前にしてヤスヒコはさつきから、鼻をすすりあげては同じ台詞を並べているのだった。

ぼく、信、それにヤスヒコ——この三人は、以前にぼくの書いた、TV局殺人事件のいきさつを、読んでくれたことのある人なら、覚えていてくれるかもしれない。

ぼく、こと栗本薫、二十四歳、職業——ま、無職かな。一応、小説のようなものを書いたのが縁で、ミステリーの評論かなんかを、やるようになり、発行部数三千というかわいらしい探偵小説専門誌「ブラックホール」に時評を連載している。

もっとも、それだけで食えるわけもなし、大学の友達の手をたどって、バイトに雑文や穴埋めコラムを書きちらして、まあ、無名の売文屋、なんていうとカッコいいけどさ。不況のあおりを食らって就職しそこねた、要領のわるい、もとロックバンド「ポーの一族」(これはのちに「ソルジャーブルー」もつとあとに「デス・スター」と改名したが)のキーボードだ。

石森信、二十六歳。いつも就職しそこねた。いや、しそこねたは愚か、いまだに相大にいて、ギターをひいてる。大体、信は一浪で、ぼくが知りあったときは一年先輩のはずだった。

それが二年、三年たつうち同級生になり、そしていまやぼくが一年留年したにもかかわらず先に卒業しちゃった。しかしさすが大物の奴は、いっかな気にするようすもなく、あいかわらず「ロックユニオン」の部屋でギターをひき、ときどき腕に覚えのPAだの、バンドの助っ人をやって稼いで餓死寸前のぼくに奢ってくれ、また西日の入る下宿でひたすらフィンガー・テクニクの鍛練に励んでいる。

こいつだけは、さすがのぼくも、ほんとのアホか稀代の大物か、よくわからない。ヌボーとしてるかと思えばけつこう口もまわるし抜け目もない。どういうわけかぼくには徹底的に愛を注いでくれて（オエ）イザというときには、実に頼もしい。

二年たてば、さしものもと「ボーの一族」のリード・ギターの外見も変化したかといえればこれがまた、百八十五センチ、五十六キロ、髪は一回切ったので肩までのストレートヘアになったがヒゲもやっぱり生えてるし、ちっとも学生時代とかわらない。

その、かわらない——いや、七年生だって除籍されかけていたってまだ学生にはちがいない、信と毎日会っているせい、職についていないせい、ぼくもやっぱりかわらない。

あいかわらず小さいし、あいかわらず細いし、あいかわらず頼りなくてロックも好きだ。

だもんで、ぼくも学生気分がぬけなくて、だからヤスヒコと一年ぶりで会ったとき、ぼくと信は、ワッ、といって目をむいたのだ。

なんたる変貌。ひさびさに会おやないか、会って話したいねん、なあ、と、電話をかけてきた関西弁は、ちよっとも変わっていなかったから、ぼくも信もうかつにも、もとのままの「ボー」の名ベージスト、加藤泰彦と会うつもりでいた。

「おま、おまえ、なんだそのアタマ」

「ヤス、カックいいッ」

待ちあわせの場所にあらわれたヤスを一目見て、信とぼくは同時にわめいた。そこに立っていたのは、あのチリチリのアフロ・ヘアーが、あざやかにもちよい長め七三分けのド短髪に、TシャツGパンのウエストコーストルックが——紺ギヤバの背広上下、白に紺のたてしま入りワイシャツ、エンジのシックなタイに社名のバッジ、片手にシオルダー、片手に紙袋——オメガの腕時計もきりりと、一人の若く有能な雑誌編集者！ だったのだ。

「おまえ、たしか修林館に入社したんだよな」

信が目をむいて眺めまわしながら云った。ヤスヒコは照れて、

「そない、見んといてな。なかみはちよつとも違^{ちが}へんよってな」

「いま、何やってんだヨ。『週刊スター』か、それとも『文学時代』か、『ランラン』か」

「そない、入社してすぐごっついとこへまわされるかいな。おれなあ——」

「うん」

「笑たらイヤやで」

「笑わんヨ」

「『りせあん』の編集部にいてるねん」

「『りせあん』？ ——なんだ、それ」

「知らなんだんかいな。へエ」

あっぱれ、編集者精神に燃えたヤスヒコは、呆れたような、さげすんだような、何ともいえない

い目で信をみた。こいつは、宮仕えの目だ。

「少女マンガの月刊誌やないか」

「少女マンガ——？」

信の目がとびだしそうに見ひらかれた。ふふ、と妙な音がその口から洩れた。

「お前少女マンガの編集者やってるのお？」

「そや。『りせあん』いうたら花咲麻紀の『星の子』の大ヒットで、いまや業界一の大手やでえ。お前ら、おれがおらんようになってから、世の中のことにうとなつたなア」

「ま——まあな」

信とぼくは顔を見あわせ、小さな吐息をついた。

「そーいや、ヤスって少女マンガ好きだったね」

とぼく。少女マンガからとって、「ポーの一族」だの「ソルジャーブルー」だのと命名したのも、ヤスだった。

「けど、それが身を助けるとはな」

信は何となく慥然としている。

「身イ助けたちうわけやあらへん」

ヤスヒコは——いや、ぴったりとかしつけた頭とネクタイしめたなりを見ていれば、ヤスだのヤスヒコだのというより、泰彦は、とこういう感じだ。泰彦は肩をすばめて、

「持ったが病で、身イを滅ぼしたんとちゃうか、思いはじめてるとこや。こうなる、知ってたら、入社試験のとき、あんまり少女マンガのことなんか、云うとくんやなかった」

「何だ、苦勞してンのかヨ、おまえ」

「苦勞？——苦勞なんてもんやあらへんがな。まあ、聞いてえな……」

そして、それから、延々二時間、泰彦の独演会がはじまったのだった。

泰彦の話によれば、ことのおこりは、「りせあん」誌の一枚看板、「星の子」の花咲麻紀と、最大のライヴアルと目されている「マリアンの青春」の水まなみとの古い確執なのだ、という。

「水まなみ、いう人はやね、もともと麻紀はんとこのアシやつたんや」

「何？ 足？」

「違う、違う、アシ。アシスタントのこと。それが麻紀のどこを独立して、『いちご色のワルツ』描いて人気出て、『少女画報』で連載やって大あたりとったんや。この、麻紀のどこを独立するときに、喧嘩別れかなんかで、ひと騒ぎあったんやな。麻紀が描こ、思ってた原案を、水まなみが先に描いてもた、とか、いやそやない、あれは麻紀のマンガをずっと水まなみがみんな考えてやってたんで、それがばからしくなった水まなみが麻紀に予定してた原案ひたたくって追ん出たんや、とか」

ともあれ、花咲麻紀と水まなみとは、互いに不倶戴天の仇敵となつた。水まなみが新興の「少女画報」こと少女画報の柱になって連載を開始したことも、「りせあん」の編集部には面白くなかつた。水まなみは、もともとが、「りせあん」のまんがスクールの研究生で、編集部が「りせあん」の一枚看板である麻紀につけて次のスターに育てようとしていた、期待の新人で、それがみごとに引きぬかれたかたちになつたからである。

「それはもちろん、オレのいてへん時分のことやから、オレは知つたことやないねん。ただ、

入ってすぐに、花咲先生の担当になったとき、あのひとは難しいから氣いつけ、ことに水まなみのことは口に出してもあかんで云われたけどな」

花咲麻紀は人嫌いで、担当が慣れてきて、情がらみになってくるとたちまちカンをたてる。それやこれやで何回もしくじったあげく、「りせあん」の上のほうは、いっそまったくの新人ということなら、花咲麻紀も失敗でも大目に見るし、少しは氣をゆるすのではあるまいか、と考えて、泰彦をつけてみる氣になったらしい。

二、三カ月はそれが奏功した。麻紀は、若い泰彦が氣に入ったようで、難題ももちかけて来ず、うっかり口をすべらせてもとびあがって怒り出す、ということもなかった。

「ところが、やな……」

それで氣をゆるしたのがいけなかった、と泰彦は世にも悲しげな顔をした。

「それがこんどは逆効果になってまいよって——麻紀ちゃんが、オレになつきすぎてしもたんや」

「なつきすぎた？」

「そやねん」

早い話が、何とか原稿を少しでも早くひたたくろう——という、それだけの泰彦の献身を、麻紀が、

「ロマンチックに誤解しはったんやね」

泰彦は吐息をついた。とたんに、信は、ひっくり返って、腹をかかえて笑いはじめた。

「何——花咲麻紀が、お前、自分に氣があつて親切にしてくれるんだって思っちゃったわけ——」

「プハハハ、こいつは、たまらんヨ。もうダメ——プハハ」

「そない喜ばんといて！」

泰彦がわめく。

「こっちは深刻なんやからな——編集部じやみんながみんな、さんざひやかして、ええな、うまいことやよつて、ええな、ええな、云うたあげく、いいか、麻紀ちやまのご機嫌損じるんやないで、相手は人間やない、金なる木イや思て、鋭意お心にそようつとめい、これは社長命令やぞオなんて……」

「そいつは、ひどい」

ぼくは泰彦に同情した。前に、新聞記事で、花咲麻紀のご面相を見たことがあったからである。

「そやろ。あんまりや、思うやろ。ああ、お前だけはわかつてくれる。薫はいつもオレの味方や……」

「バータレ」

信がまだ口が耳まで裂けそうなくらいニタニタ笑いながら云った。

「いてこませ、いてこませ。お前知らんのか。きいたことないのかヨ。花咲麻紀が去年何億稼いだのか、新聞で読まなかつたのかヨ。二億五千万だぞ、二億五千万。うち八割、税金でさっぴかれたつておまえ——これ、見のがす手ないわヨ。見のがしたつたらおまえ、男じやないヨ、バータレ。向こうがその気なんだろ。がんばれ、ケツパレ、結婚してジャーマネにおさまるんだヨ。いいか、そんなときは、オレらにもちよつとはわけまえを……」

「信！」

泰彦は本当に怒ったらしく、いきなりテーブルを、パンツと平手で叩き、その振動で、食いのこしのトリと飲みかけの銚子は威勢よくとびはねた。

「ええ加減にせえよ、なあ、オレ怒るで、人がまじめに、ほんまじめにやな、悩んどる、ちうてんのに——お前らはもう……」

「ちよつと、一緒にしないでよ。いつだってまじめですよ、ほかあ、信先生とは違いますよ」

「オレもヨ。マジ、マジ、マジホンの信ちゃんを見忘れたか」

「なあ——頼むよってな」

やっぱり、ヤスのやつ、相当日和つたな——ぼくは内心考えた。昔はたしかに、こんなにすぐ青ざめて腹を立てるような奴じゃなかった。

苦勞してンだろうな——ぼくはこつそり首を振る。

「けどさ」

信も気の毒になったらしく、首をかしげてきいた。

「おまえそこまで、そんなに花咲麻紀が嫌いな？ 顔見るのもイヤなほど？」

「そ——そやないけど」

「別に、さあ結婚してって迫られてるわけじゃねえンだろ？」

「あ——アホ云わんといてな」

「声がふるえてやがんのこいつ……それともなにか、おまえ、わるいことしたの？ 何かこう、結婚してエ、責任とってエって、億万長者のマンガ家ちゃんに云われてしゃーないようなこと、